

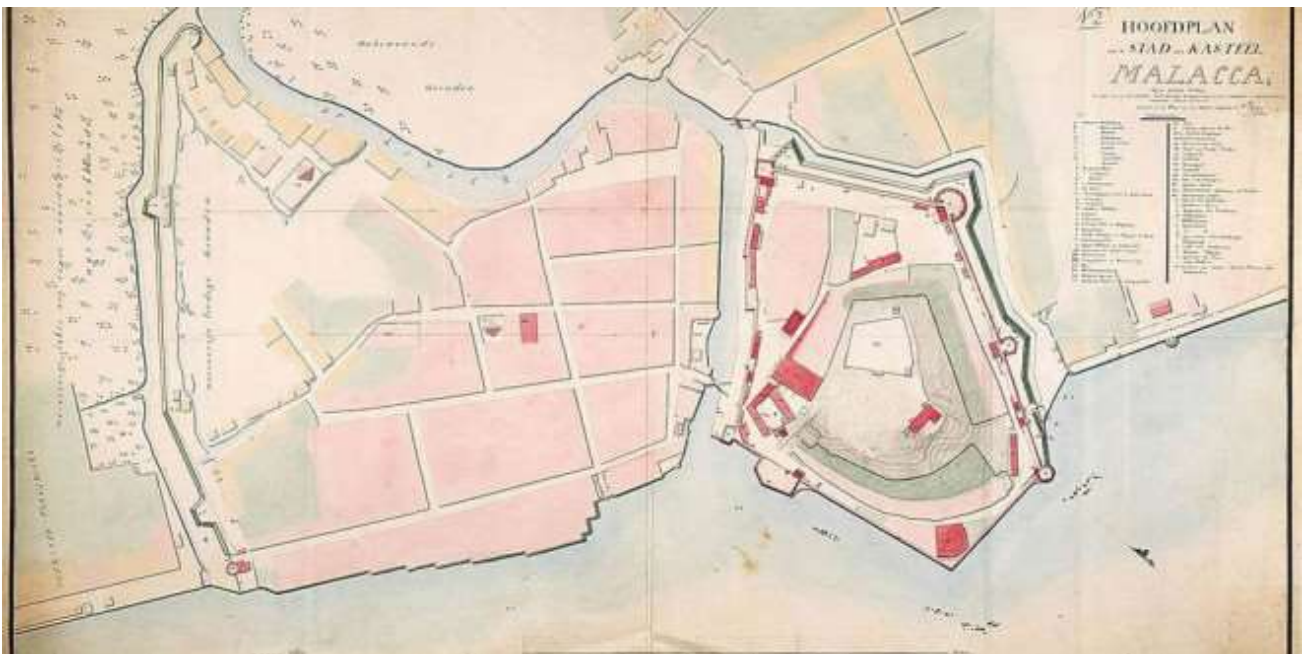
## 第七節 マラッカ港市の崩壊

サルタン Mahmud は司令官デ・アルブケルケの態度を読み間違えていた。彼はポルトガル人たちが北東風を待つだけでゴアに戻ると考えていたのであった。すぐに消火されたが幾隻かの商船に火をつけたのは示威行為として考えていた。戦略の専門家としてデ・アルブケルケは攻撃を開始する前に十分な準備を行っていた。1511年7月25日に最初の攻撃が突然始まった。マラッカ川の橋が奪われた。日が暮れはじめたのでポルトガル軍は海上に引き上げた。二週間の休息と戦略の詰めの後、二回目の攻撃がその目標にぴたりと合わせて敢行された。港に集中していた敵に対する防衛線は破られた。マラッカ港は奪われてしまったのであった。サルタン Mahmud は部下とともにあわてて都を離れた。彼は Muar からの反撃を意図していたが、この攻撃は失敗に終わった

ポルトガル人たちは極めて高い闘志とよりすぐれた武器を有し十分な戦闘訓練を受けていた。インド西海岸でのグジャラート、カリカット、ペルシャ、エジプトの人たちとの戦いで得た連戦連勝感が、ポルトガル人たちはどこの敵でも対戦できる可能性があるという彼らの闘争心と自信を高めたのであった。彼らは故国から遠い戦場にいた。国の名と彼ら自身の身の安全を守るために彼らは好むと好まざるにかかわらず死に物狂いで戦わなくてはならなかった。自国を防衛するためにマラッカの軍隊はこのような精神を持ち合わせていなかった。復讐戦を行うために退却してよい機会を狙う態度は實際上、この行動は彼らが死守すべきであった地点を占領するために敵に機会を与えてしまうので、戦略的に誤った措置であった。その奪回は簡単ではなかった。この退却は敵に前進の機会を与え、闘争心を掻き立てたのであった。

サルタン Mahmud はマラッカをポルトガル人の支配から解放することができないと悟った後、Pahang に避難し、その後 Bintan へ、最後には Kampar へと逃げた。彼らは外国勢力、ポルトガル人の手中に落ちたのであった。国家の政治は植民地政治へと変わった。マラッカ港を通じて、この植民地勢力はその翼を東方へはインドネシア地域に向け、北方へは南シナ海沿岸諸国に向けた。〈213〉国際交易の玄関は植民地支配の入口になってしまったのであった。

ポルトガル人たちに完全に支配された地域は、海岸地域をはじめ南は Muar 川から北は Kinggi 川までで、その距離は約 50km であった。占領地域を防衛するためと軍隊の安全の面からデ・アルブケルケは海に近い(mengongkang laut)マラッカ川の左岸の丘の上に A-Famosa 要塞をただちに建設するように命令した。この場所は大変戦略的な地点であった。それは広い海に面して高い位置にあった。この地点から平地付近でなにが起きたかを見ることができた。このような位置の砦は敵が簡単に急襲できないのである。この場所は行政の中心になった。壁が高く A-Famosa と名付けられたこのポルトガル要塞は五角形で兵営を備えていた。この要塞は 1641 年まで持ちこたえたのであった。



マラッカ港市の支配はポルトガル人たちに満足感を与えた。東の諸国の香料交易を支配する彼らの夢がマラッカ港の支配でかなえられたからであった。デ・アルブケルケはマラッカ要塞の完成後にインドからポルトガルに帰国した。ポルトガルへの帰国の途上で、彼はペルシャ湾のホルムズとアラビア半島南端のアデンを奪おうとした。アデンの奪取は失敗に終わった。この失敗を否定しなかった意味とは、既にポルトガル人に事前に支配されていたソコトラ<sup>1</sup>経由でアデンを経由せずに紅海を通して商品を運べたからであった。ソコトラ経由でこの荷物は紅海へ運ばれ、その当時にはまだ紅海と切り離されていた地中海を目指した。スエズ運河はまだ開鑿されていなかったの

<sup>1</sup> (訳) Socotra インド洋西部でアラビア半島の南東にある島

である。1511年にデ・アルブケルケは死去した。〈214〉

マラッカの安全とマラッカ港でそのすべてを支配している香料貿易を盛んにするためポルトガル人たちはシャムとビルマとの間で友好条約を締結した。Paramesawara 王の治世以来シャムはマラッカを恐れさせる脅威となっていた。この友好条約はリスボンへ輸送する香料を積んだポルトガルの商船の交通に関する条約であった。すべての船舶は障害なく自由に航行することを許可するマラッカ要塞のポルトガル軍司令官の書類を持っていた。この条約は、ベネチアの商人に香料を売るアラブとペルシャ商人たちが所有する船舶を第一とする他国の船舶に対する攻撃を意味したものであった。このような経緯で、ポルトガル人たちとシャムとビルマとの友好条約はアラブからインドまでの沿岸地域のイスラム商人たちにとって直接的な打撃となった。リスボン港はヨーロッパの香料販売の中心地になった。得られた利益は有り余るものであった。

## 第八節 ジャワからの攻撃

1509年以來、Jin Bun の長男 Yat Sun 別名 Adipati Unus/Yunus は既にマラッカ攻撃の準備ができていた。彼はもう長いことマラッカに狙いを定めていた。しかし 1511年にその計画はポルトガル人たちに先を越されてしまった。ポルトガル人たちがマラッカでの防衛を強化する前に、Yat Sun はマラッカを急襲するつもりだった。

マラッカの町にはジャワ商人がたくさん住み着いていた。かれらは連絡を取ることを必要とされスパイにさせられた。この戦術は戦争の準備で普通行うものである。スマランの最高権力者である Kin San は三年間にわたりマジャパヒトの中央政府内でスパイとして働いたことがあった。Kin San と Yat Sun のスマランでの協力は極めて緊密であった。戦術として、かれは Kin San 別名 Raden Kusen からたくさんのことを学んだ。〈215〉マラッカに居住しているジャワ人たちを Utimuti Raja は熟知していた。ポルトガル人のマラッカ攻撃の中で Utimuti Raja はポルトガル側を支援した。マラッカがポルトガルに占領されてから Utimuti Raja はマラッカとジャワの間を往復する商人たちと秘密の連絡を取るようになり、Demak 側からの特命を携えてきた。Utimuti の庇護の下に集まったジャワ商人たちとは別に、Utimuti Raja はマラッカのサルタンの継承権を持

つマラッカ国籍の一人と連絡を取っていた。Utimuti Raja はポルトガルの秘密警察に嗅ぎつかれた。Utimuti Raja は死刑の判決を受けた。その後継者として Patih Kadir が指名された。ポルトガル人に対する反乱を Patih Kadir が率いたのでポルトガル側は深く失望した。Patih Kadir の反乱は鎮圧された。

Yat Sun 別名 Adipati Unus/Yunus は 1512 年に艦隊を率いて Demak からマラッカへむかった。Yat Sun が大いに期待していたマラッカ在住のジャワ社会の援助は、同社会の指導者であった Patih Kadir が Cirebon に逃げてしまったために全く来なかった。マラッカに到着した艦隊は要塞で準備万端整えていたポルトガル人たちと対戦した。マラッカ海岸に近づいた艦船は丘の上の要塞からの砲弾の雨に遭った。Yat Sun に率いられたジャワ軍の攻撃は失敗し、海岸から追い払われた。ポルトガル人たちはサルタン Mahmud の娘婿である Kampar 出身の Abdullah Raja に支援された。サルタン Abdullah は、自分がポルトガルの保護を受けてサルタン Mahmud に代わってマラッカのサルタンに意図的に昇格させようというポルトガル人と連絡を取っていた。しかしサルタン Abdullah は運が悪かった。ポルトガル人たちはムスリムたちに敵対姿勢を取っていた。Yat Sun に対抗する上でポルトガル人を支援したのではあったが、サルタン Abdullah は疑われ続けたのであった。〈216〉マラッカのサルタンになる夢は叶わなかった。マラッカ港の支配は A-Famosa 要塞にいるポルトガル人自体が行った。とりあえずは、彼らはマレー人の協力を必要としていなかったのであった。

Demak の艦隊は、今回はより良い装備と準備を持って実行する攻撃でマラッカ港を奪還できるだろうという希望を持って帰港した。Yat Sun は失望した。

艦隊を増強するために Gan Si Cang の支援で、Yat Sun はスマランの造船所での造船量を倍増させ、海からマラッカを包囲するのに足りるようにした。Kin San の支援で Yat Sun は遠距離から A-Fomosa 要塞を砲撃するに十分大型の大砲を持った艦隊を整備した。Yat Sun は丘の上の A-Fomosa 要塞に巢食っている敵の状態を的確につかんでいた。1513 年に修理のためにスマランでドック入りしていた Sunan Kudus の称号を持つ Jafar Sadiq の船を手本として、Ta Chih (Aceh 式) の木造船を建造することが命令された。400 人の兵員か 100 トンの貨物が積める中国風の大型ジャンクはより高速で航行ができるように改良が施された。大艦隊とよりすぐれた軍備をもって彼はマラッカのポルトガル砦を殲滅できると期待していた。マラッカへの攻撃は Yat Sun

の式の下で 1521 年に繰り返された。二回目の攻撃も失敗に終わったのだった。

## 第九節 香料国への航海

1511 年 8 月にマラッカ港はポルトガル人の手中に落ちた。この 1511 年の末に東インドネシアの香料産出国へ航路がポルトガル人たちによって開拓された。Maluku 諸島への航路の案内人として働いたのは、安い値段で香料を仕入れるために Maluku に航海するのが普通になっていたインド商人であった。〈217〉このインド商船は一隻のポルトガル艦船に護られて Maluku を目指してマラッカに向かった。この香料国への航海は整然と行われ、他の商船を妨害しなかった。この航海の最大目的はマラッカから Maluku までの航路を知ることであった。他にはなかった。1511 年のこの航海は調査航海であった。彼らは新しい敵を探すためではなく、商売でさらに大きな利益を上げる香料の生産地を探すことを意図していたのであった。

香料の生産地がわかり、航路が開拓された。希望する時は毎回、ポルトガル人は航路の案内人なしで航行ができるようになった。Maluku への二回目の航海は 1514 年に続いた。それ以降、ポルトガル船は交易のために規則正しくマルク諸島を訪ねるようになった。マルク諸島からのポルトガル船による香料の直接輸送は、マジャパヒト王国の崩壊以降に香料交易とインドネシア海域での交通を支配してきた華人商人に損害を与えた。香料の価格がバイヤー同士の競争の影響であがったので、マルク諸島の人たちにとってはこのポルトガル商船の来航は喜ばしいことであった。ジャワ島沿岸の華人商人とジャワ商人たちは、香料貿易を独占したり自分たちが思う通りに値段を決めることができなくなった。このような経緯で、ポルトガル商船の来訪は、香料の生産者としてのマルク諸島の人たちの側から賞賛を受けたのであった。

ポルトガル人たちによる香料貿易は、マルク諸島にいる彼らが資金面、一括買付、軍事においても最強の商人で構成されていたので順調に進んだ。ポルトガル艦隊は香料輸送のためにマルクへと行ったり来たりする商船を警備した。〈218〉香料の買い付けは現地住民から直接行われた。ポルトガル船の来航以来、マルク諸島での香料取引はポルトガル側に独占されてしまったのであった。

スペイン商人たちもマルクへ同じ時期に来航した。1527 年、マゼラン<sup>2</sup>に率いられたスペイン商船がマルクに到着し、住民たちから香料をまとめ買いをした。ポルトガル人とスペイン人の間の香料取引の奪い合いは避けられなくなった。最終的には、この商人たちの両派の間で戦争が起きた。スペイン商人はマルク諸島から追い出された。それ以来、ポルトガル人は、住民たちから買い集めた香料を保管する高い塀で囲まれた倉庫を建て始めた。このような方法で、住民から直接香料と一緒に買ったがっていた商人たちはその機会を失った。香料の独占取引は完全にポルトガル人の支配下に入った。

Demak の華人商人はひどい損失を被ったと感じた。マラッカにポルトガル人が来航して以来、ポルトガル人たちは Demak の人たちの敵としてみられていた。1512 年と 1521 年のマラッカ攻撃は失敗に終わった。三度目の攻撃は、前回よりずっと大規模で行われた。サルタン Trenggana の息子の Muk Ming は大型ジャンク船 1000 隻をスマランの造船所で建造した。スマラン造船所で華人船大工たちが日に夜をついで骨惜しみせずに働いた。マルク諸島からポルトガル人たちを排斥するために Demak 艦隊は 1546 年にマルク諸島に向けて移動した。遠距離砲を備えるポルトガル人の装備は Demak の Kin San が製造した大砲よりずっと高性能であった。三回目の攻撃も失敗におわった。〈219〉香料の取引はそっくりポルトガル人に支配されたままであった。

## 第十節 マジャパヒトとの関係

マジャパヒト太守 Girindrawardhana は、自分の軍隊が粉砕されて国民経済も弱くなつてはいたが、Demak への復讐戦の機会を待ち続けていた。国民経済を良くするための一つの方法は 1511 年以来、香料輸送のためにマルクとの間を行ったり来たりしているポルトガル人と通商関係を樹立することであった。北岸の諸港市は Demak 政府に忠実な華人に支配されていたにも関わらずであった。ジャワ島沿岸の港市へのポルトガル船の来航は、Jin Bun の同調者である華人たちによって厳重に警戒されていた。ポルトガル人は Demak 人の敵であることを Demak 人は知っていたのであった。このことから、ポルトガル商人たちとマジャパヒト商人たちの関係が Jin Bun に報告さ

---

<sup>2</sup> Magellan はフィリピンで Coa Sing Som 別名 Sulaiman に殺された

れた。Jin Bunは激怒した。マジャパヒトの都はDemakから襲われた。マジャパヒトの都は1517年にDemak軍の掠奪に遭った。

しかし、Girindrawardhanaの妻はJin Bunの義理の妹であったので、Jin BunはGirindrawardhanaに情けをかけた。このような経緯で、Girindrawardhanaはそのままマジャパヒト太守でいることを許されたのだった。マジャパヒトへのDemakの監視はますます厳しくなった。

Girindrawardhanaはまだ反省していなかった。彼はマラッカのポルトガル人たちと秘密関係が続けていた。彼はJin Bunの支配から自分を解放するためにマラッカからのポルトガルの支援を得ることを希望していた。1521年にマラッカ攻略の後、突然Yat Sun 別名 Sultan Unus/Yunusが亡くなった。Yat Sunは子供を残さなかったため、その後継者争いが起きた。Jin Bunの子供たちの中での権力抗争が燃え上がったのであった。〈220〉

Serat KandaによるとJin Bunには、Giri出身の第一夫人から生まれたSuryaとTrenggana、Randu出身の第二夫人から生まれたKanduruwan、Bloraの東側のJipang出身の第三夫人から生まれたKikinの四人の息子がいた。SuryaはYat Sun、Pangeran Sabrang Lor (Babad Tanah Jawi 中の)と同一人物である。Raden KanduruwanはRaden Trengganaより年上であった。この跡目争いでTrengganaがその勝利をつかんだ。

この1521年のJin Bunの息子たち間の跡目争いは太守GirindrawardhanaにDemakから自分を解放する好機を与えることになった。しかし彼はマジャパヒト王国の崩壊後、自分の軍隊を持っていなかった。一つの希望とはマラッカからのポルトガル人たちの支援であった。期待した支援は来なかった。彼らはマラッカを空けるのを恐れていたものであった。その理由とは、第一に彼らはDemakからの攻撃を反撃したばかりであったことで、第二に極めて疑わしいマラッカのサルタンMahmudの姿勢であった。サルタンMahmudの軍はいつでも攻めてくることができた。1515-1519年の三年間にマラッカはサルタンMahmudの軍に三回攻撃された。この攻撃は反撃されてしまった。サルタンMahmudは秘密裏に軍備を整えていたのであった。事実、続く攻撃は1523年に起きたのであった。



Sunan Gunung Jati,  
Toh A Bo

Dyah Ranawijaya Girindrawardhana はまだ希望を捨ててはいなかった。ポルトガル人との関係を秘密裏に続けていた。1521 年に彼は柵封依頼のために中国に使節を送った。その時に、サルタン Trenggana の支配は日ごとに強まった。マジャパヒト太守側から発生するかもしれない反乱を防ぐために、1527 年にサルタン Trenggana は後に Sunan Gunung Jati になる Toh A Bo という名の息子の指揮下で軍隊を Demak からマジャパヒトに派遣した。マジャパヒトの都は占領された。同年に亡くなった Girindrawardaha の後継者は任命されなかった。Girindrawardaha の子供たちは Pasuruan や Panarukan に避難した。マジャパヒトの歴史がここで終焉したのである。〈221〉

は任命されなかった。Girindrawardaha の子供たちは Pasuruan や Panarukan に避難した。マジャパヒトの歴史がここで終焉したのである。〈221〉

## 第十一節 Demak と Sunda との関係

現在 Bogor 市に保存されている Batutulis 碑文によると、Sunda 国は 1333 年に Baduga Maharaja によって建国されたとのことである。その都は現在の Bogor 市である。パララトンでは Pasunda-Bubat<sup>3</sup>とも呼ばれる Bubat 戦争との関係の中で Baduga Maharaja に率いられている Sunda 国の存在が述べられている。Paunda-Bubat については Menuju Puncak Kemegahan<sup>4</sup>の中で十分に解説したからここでは繰り返さない。



Batutulis 石碑

1526 年にマラッカのポルトガル人たちはマラッカ出身のサルタン Mahmud が避難した Bintan の都を壊滅させようとした。Bintan からサルタン Mahmud Syah はポルトガル人たちが占領したマラッカを解放しようと努力した。上に述べたようにこのサルタン Mahmud の攻撃は失敗に終わった。ポルト

<sup>3</sup> Pararaton 28/29-29/19 頁

<sup>4</sup> 同じ著者の本。同著の p190-194 に Pasnuda-Bubat について詳述している。(訳)本件に関する解説は p256~262。本文の註は誤り。和訳本では p221~225 参照。



ガル人たちの報復攻撃は 1526 年に行なわれた。Bintan の防衛は粉碎された。サルタン Mahmud は Kampar に避難したのだった。

1522 年にポルトガル人たちは Sunda 王との通商条約を結ぶために Sunda 港に來航した。1522 年 8 月 21 日にポルトガル側とスンダ側との間で通商関係を結ぶための合意に至った。この合意<sup>5</sup>の中には、ポルトガル人たちが要塞を建設することを許可することとその要塞の場所を Kalapa<sup>6</sup>にするという選択を許可することが述べられている。

マラッカの歴史からわかったように、ポルトガル人たちはここ数年間ずっと、時々急襲をかけるサルタン Mahmud の動きに疑いをかけ続けていた。〈222〉1523 年、ポルトガルとスンダの合意に署名された一年後にサルタン Mahmud は攻撃をかけた。最終的に、その脅威から自分たちを解放するためにポルトガル人たちは 1526 年に Bintan 島のサルタン Mahmud の防御を攻めた。Bintan はポルトガル人に奪われてしまった。サルタン Mahmud は Kampar に避難した。このような経緯で 1522 年に合意された Sunda Kelapa 港の要塞の建設は頓挫していた。

マラッカに 1512 年と 1521 年に攻め込み、ポルトガル人たちを自らの敵とみていた Demak のサルタンはこの Sunda Kelapa に関する合意の件を聞いて喜ばなかった。この時、Yat Sun 別名 Adipati Yunus はすでに亡くなっており、弟の Sultan Trenggana 別名 Tung Ka Lo に代わっていた。1526 年に Demak のサルタンは、後日 Faletihan あるいは Syarif Hidayat Fatahillah 別名 Sunan Gunung Jati の名で知られるようになる Demak 軍司令官の指揮下で西に向けて艦隊を派遣した。

Demak のサルタンはポルトガルとスンダとの条約を目に入ったごみとして見ていた。この条約によってポルトガル側が将来ジャワ島までその支配を広げる心配があったからであった。この件は Demak 人たちが行っている独占交易を損ねるとともに、将来 Demak のサルタンの地位を危うくするものであった。それ故、ポルトガル側が Sunda Kalapa に要塞を完成させる前に、この港を Demak 軍で前もって奪取しなくてはならな

---

<sup>5</sup> この合意に関するポルトガル人側からの書面での声明は、Dr. F. de Haan 著で 1923 年に出版されたの Oud Batavia の Platen Album にオランダ語に翻訳されたものが公開されている。この Batu Tulis 石碑はジャカルタの博物館に収納されている。これに関する資料と写真は Afd. E.I に収納されている。(訳) この石碑はジャカルタの博物館ではなくボゴールで保管されている。

<sup>6</sup> (訳)現在のジャカルタ北海岸にあるスンダクラバ港。

かった。このような経緯で 1526 年に Demak のサルタンは西の方角、正確には Sunda Kelapa 港を奪うためにその港に艦隊を派遣した。言い換えると、Demak 軍はポルトガル人たちと友好条約を締結した Sunda を攻撃したことになる。〈223〉

Demak とスンダ間の関係は極めて困難な問題になった。このことは故 Husein Jayaningrat 教授の 1913 年の博士論文「バンテン史に対する批判的考察」<sup>7</sup>で詳しく研究されている。Husein 教授の上記の功績は記念碑的存在である。スンダクラパに來航したポルトガル人たちに関して、上記の本の中で Husein 教授が詳しく解説している。1954 年に Sukanto 教授が「ジャカルタからジャヤカルタへ」という本を出版した<sup>8</sup>。ポルトガル人たちの Sunda Kelapa への來訪の記事を引用した後に、かれは Sunda Kelapa の名が Jayakarta<sup>9</sup>になった日付を確定している。注意が必要なのはポルトガル人の來訪と Demak 軍の Sunda Kelapa への來訪の件である。

1526 年 10 月 23 日に Fransisco de Sa 指揮下のポルトガル艦隊は Bintan を目指した。Bintan への遠征を成功させた後、そのまま彼は Sunda に航海を続けた。艦隊中の一隻は強風で転覆し、その後他の船と離ればなれになって Kelapa 港近くの海岸に打ち上げられた。Faletahan に率いられ、数日前に Sunda 王の支配からこの港市を奪取したムスリムグループにこの船の乗組員は全員殺されてしまった。Fransisco de Sa が Sunda Kelapa に到着した時に彼は Faletahan から反撃されて損害を受け退却し、その後マラッカに戻った。これがポルトガルの資料の骨子である。〈224〉

このポルトガルの資料から、Sultan Trenggana が派遣した Demak 軍は Sunda 王の権力から Sunda Kelapa 港を奪うことに成功し、ポルトガル艦隊が Fransisco de Sa 指揮下でマラッカを 10 月 23 日に出發し Sunda Kelapa に到着する前に Sunda Kelapa を占領していたことが明確になった。このことから、1526 年末に Faletahan は二回勝利したことがわかる。最初の勝利は Sunda 王に対する戦いの中で得たもので、二回目の勝利はポルトガル人との戦いで得たものである。

---

<sup>7</sup> Critisch beschouwing van de Sejarah Banten 「バンテン史に対する批判的考察」は 1913 年に出版された。その資料は J.de. Baros 著 Da Asia である。したがってこの原本はポルトガルの資料である。

<sup>8</sup> Dari Jakarta ke Jayakarta 「ジャカルタからジャヤカルタへ」の中で、Sukanto 教授は Sunda Kepala が Jayakarta に名前が変わった日付について研究している。作者は 1527 年 6 月 22 日と確定している。この日付の確定は、Sukanto 教授と Husein Jayaningrat 教授の討論の材料になった。この誌上の論戦は雑誌 Bahasa dan Budaya の V/1 と V/3 年に掲載されている

<sup>9</sup> (訳) 「勝利の町」の意。

ここで注目すべきことは Faletehan 自身に関する Sukanto 教授の解説である。曰く「Faletehan はポルトガル人を極端に憎んでいた。彼と他のイスラムの同士はポルトガル人が Pasai を奪った後に Pasai に行った。Sunda 王が Sunda Kelapa にポルトガル人が要塞を建てることを許可したゆえに、Faletehan は Sunda 王と Sunda Kelapa を非常に憎んでいた。この町は彼に奪われ、スンダ人たちはこの戦いで潰えたが、Faletehan にとってこの勝利は最終的なものではなかった。完璧な勝利とは完全な勝利であった。これが Jayakarta の意味である。それ故、この勝利は達成されたものとして初めて Faletehan が思ったものであり、その後彼はポルトガル人に対して二回勝利した。ゆえに、Fransisco de Sa が反撃を受けて撤退したあとの 1527 年 3 月中旬頃以降に、Sunda Kelapa の名は Faletehan によって Jayakarta に代えられたことになる。

Faletehan がムスリムとしてこの地名を与えた日を探すのにはジャワ・ヒンドゥーの暦ではなくイスラム歴で決めようとした可能性が高い。しかし、彼の妻 Toh は Trenggana 王子である Demak 王の妹であったため、ジャワの風習に影響されていた指導者として、また彼の兵隊の大部分はジャワ人から構成されていたこと、彼はジャワ人社会で生活していたことから、この風習を重視したことも確実である。一般的にジャワ人と Sunda Kelapa の原住民のスンダ人の習慣は同じであった。〈225〉ジャワとスンダの人たちの生活に関する感覚はそのほとんどが同一であった。

その当時ジャワにやってきたばかりのイスラムの暦はまだ Sunda Kelapa の住民の心の奥底にはしみ込んでいなかった。公平な Faletehan である賢明な人がこのやりかたをとったことを私は確信している。彼は注意して物事を進めなくてはならず、その大多数がジャワ人であることが確実な環境下での人々と助言者の声を無視できなかったのだらうと思われるのである。

「第一の季節が収穫月かその後の月の六月に相当するので、Jayakarta の名前が与えられたのは第一の季節の一日、すなわち 1527 年 6 月 22 日であろうという少なからぬ可能性があると思われる」と上に述べたことを思い出してほしい。ただしこの日付は確証できないのではあるが。

Faletehan に関する Husein Jayanigrat 教授の説は以下のようなものである。「Faletehan はイスラム法学者でありイスラムの同士である。Demak の三代目のサルタン Trenggana

王子は Falateran の門下生でありかつまた彼の姻戚の義兄弟である。西ジャワへのイスラムの布教と信仰の維持のためにこの師匠を支援した軍人たちは、Faletehan を危険の中に放置しない信頼できるイスラム魂を持った人たちから選ばれ、さらには Trenggana 王子の妹の Faletehan の妻も夫に同行したのであった<sup>10</sup>」。

続いて Husein 教授は、Faletehan と Sunan Gunung Jati が同一人物であることはインドネシアの歴史家がみとめるところであり、ジャワとスダの伝承によると Sunan Gunung Jati はイスラムの創始者ムハンマドの子孫であると記している。〈226〉ポルトガル人によると Faletehan は Pasai 生まれの人間で下層階級出身であるので、この伝承は一概に無視できないのである。(p74, p107-108 参照)<sup>11</sup>それ故、ポルトガル人が Falaterhan を蔑視したことが理解できるのである。

Sunda Kelapa から Jayakarta に名前を変更した日付を確定する必要性から、Husein 教授はこのように述べている。「イスラム法学者でありムハンマドの子孫である Faletehan はスダ王から Sunda Kelapa を奪い取ったこの極めて重要な勝利を熟視して、最も重要なムハンマドがメッカの支配をクライッシュ族から奪って『本当にわれは、明らかな勝利をあなたに授けた』というムハンマドに対するアッラーの言葉を思い出したことを Faletehan が考え、その後自分を Fathan(聞き間違いと書き間違いでポルトガル人は Faletehan と記録した<sup>12</sup>)と名付けた宣託を得て、Sunda Kelapa を Jayakarta すなわち fathan mubinan と改名したと想像することもできる。12月17日の Mulud<sup>13</sup>の祝祭日に彼はこれを公示した。Faletehan の英知を探すと、ここに彼の聡明さがみられ、彼は fathan という原形の語を自分と町の名前に用いてアラビア語の fathan mubīnan からの解釈が一般的になったのである<sup>14</sup>」。

このように Sukanto 教授は Sunda Kelapa が Jayakarta にその名を変えた日付が Husein 教授の説と異なるのである。一方は 1527 年 6 月 22 日でもう一方は 1526 年

---

<sup>10</sup> Bahasa dan Budaya VI/1 年 p9.

<sup>11</sup> (訳) 原文ではこのページに当該記事は見当たらない。当該記事は原文の p122 にあり、この和訳では p123 に示す。

<sup>12</sup> Fathan から Faletehan に代わった名前と Al-Fath(アルファトフ)の章に関して De naam van den eersten Mohammedaanschen vorst in West Java (T.B.G. 1933)で論議した。ここでメッカのムハンマドに下されたこの章に関連する解釈とも呼んでいる。

<sup>13</sup> (訳) ムハンマドの誕生日 Maulid Nabi

<sup>14</sup> Jayakarta のかわりの Surakarta あるいは Sulakarta の名は実際には使われていない。P76 の註 1 を参照されたい。(訳)該当註は原文中に存在しない。

12月17日である。〈227〉この正確な日付は現在に至るまで資料の不足により確定できていない。実際に必要なのは日付ではなくて歴史的イベントである。この件はスマランとチレボンの Talang 廟資料を利用してさらなる研究が必要である。